

熱湯の噴き出す地の底。

男たちが掘る石炭を

這うようにして運び出す女の「あと山」。

死と隣り合わせの坑内で

ときには男と張り合い

はじめての恋に胸を焦がし

青春のすべてをあと山に生きた女たち。

女あと山の青春の軌跡をたどりながら見つめる

女の性と労働。

地底の青春

真尾悦子

女あと山の記

地底の青春
もと山の記
真尾悦子

真尾悦子（ましお えつこ）

1919年、東京に生まれる。

旧制共立女子専門学校卒業。作家。

著書に『たった二人の工場から』『旧城跡三十二番地』（以上未来社）

『土と女——出稼ぎ未亡人とその周辺』（筑摩書房）などがある。

地底の青春—女あと山の記

1979年9月20日 初版第1刷発行

Printed in Japan



著 者 真 尾 悦 子

発行者 関 根 栄 郷

発行所 株式会社 筑 摩 書 房

101-91 東京都千代田区神田小川町2-8

振替 東京 6-4123

電話 東京 (291) 7651 (営業)

(294) 6711 (編集)

0395-05019-4604 ©ETSUKO MASHIO

厚徳社・積信堂

目次

第一章	薄暮のトテ馬車……………	5
第二章	地底の青春……………	59
第三章	タンガラの歌……………	107
第四章	柵外に生きる……………	177
	あとがき……………	215

地底の青春——女あと山の記

第一章 薄暮のトテ馬車

開腹手術をうけた藤沢マキさんは、二か月目によりやく退院した。盲腸炎をこじらせたのである。

しかし、思いのほかに元気で、肩の丸味も衰えてはいない。髪も、見舞いに行った私よりずっときれいにとのえていた。

いわき市は、やはり東京より秋が早いようである。

縁側のガラス障子をしめに立った彼女が、

「あ、千枝子 came ——」

と伸び上がった。

見ると、下の坂道に白いライトバンが停っていた。

日曜日は野菜の仕入れがないから、私を勿来なこその閑跡へ案内する、というのである。千枝子さん

は、市内^{まち}好間の国道沿いに小さな食料品店を出していた。マキさんの長女で、四十歳。

「母ちゃん、早いとこ仕度しなよ。着るもんなんか、どうでもよかつぱ」

「ンでも、やっぱ、ほかさ行ぐんだからよ」

千枝子さんは、じれったそうに玄関で足踏みをした。男の子のようなショートカットにジーパン。肉の締まった、母親似の小柄に、真紅のＴシャツがよく似合っていた。

・店番はおやじがいっから心配ねえし、ゆっくりしてくつべね。

街の騒音にも紛れない、高く透る声で、運転席から話しかけてくる。マキさんは、うれしそうに窓外を見ていた。病患後、初めてのドライブだという。

国道を、四十分ほども走っただろうか。関田^{せきだ}の立体交差点を右折後、左へ上ると、道はそのまま関跡へ通じる。意外にも、そこは新しく舗装されていた。

古歌にゆかりの桜樹は見当らず、枝を張った十数本の松が影を落している。頂上の広場に観光バスが一台。手前には、木柵で囲まれた石碑が見えた。

「千枝子、ちよっとくるま停めとくれ。ホレ、右にプレハブの小屋があつて。あれは、失対の人らが集まるとこなのよ。昼休みに弁当食べたりしてね。この道はねえ、下からずうーっと全部、わたしらがつくったんだよ。何年かかったつぺなあ！　まアだ、これで完成はしてねえんだ」

マキさんは、黒いスカートの裾をつまんで車から下りた。

台地には、散在する歌碑の周囲に、若いハイカーや、観光バスの客らしい中年婦人らが群がっ

ていた。左、真下は、いま通ってきた国道六号線。遠方は太平洋。

だが、彼女には、碧い空も、松の老樹も、人影も、まるで眼中にない様子である。いきなり、ストンとしゃがみ込んで、アスファルトの路面に舐めるような視線を這わせた。

「仲間とあつばって（集まって）、何かかんか話イしながら仕事してたのよ。ここは天下の名所だつて。おてんとさまの下だつべしよ。まったく、こたえらんねえわ」

千枝子さんは、仕方ないなあ、といった表情でエンジンを止めてそばへきた。

「母ちゃんねえ、こんな大病をしても、まだ失対さ出る、てきかねえんだよ。自分の年イ考えてみな、て言うんだけどさ。七十にもなったら、いい加減におとなしく隠居するもんだよね。若いときからよ、つばら（うんと）働いてきて、このうえ子どもに逆らってまで土方つづけたいなんて、いったい何しに生きてきたんだつべねえ」

マキさんは、路上の砂ぼこりを丹念に掌で撫で払っていた。

「いっつもこうやって説教されてんだ。からだ動くあいだは働かしてもらったほうがありがたいのにさ。たまに遊ぶのはいいけど、毎日、たアだ座敷にお坐りしては、生きてる氣イしねえんだてば。子育てのじぶんは、確かにカネの亡者だったよねえ。炭鉱稼ぎしても何しても食わねえなんねかった。いまはハア、物もカネもいんね。年とって、マンマもたんとは食わんね。欲も得もねえけど、ジツとしてるのが性に合わねえちゃうか……。土方だって、新規採用はしねえ。役所は人を減らす勘定してんだから、うっかりすつとクビだよ。体はもう大丈夫。ど

「つこも痛くねえもの」

「ほんとに嫌^きなっちゃう。こうやって母ちゃんに口説^{くど}かれつと、始末になんねのよ。息子四人娘一人、みんな何とか一丁前に暮してつうのに、誰とも一緒には住まねえしね」

いたずらっぽく娘を見上げるマキさんは、もとから陽に灼けにくい肌なのが、ながい病院生活で、よけい、ぬめぬめと白くなっていた。

彼女は、十五歳から坑内へ入ったという。結婚後も、常磐地方の炭鉱を転々として働き、閉山後は失対人夫になった。夫と死別したのは五年前である。

「わたしが、この年して土方に出るちゅうと、子どもらに迷惑がかかっかもしんねえ。ンだから、こうして頼んでるんだよ。好きで、勝手にやってんだア、て、おでこに貼紙でもすつか。始末わりイばっぱ(婆さん)ですまねえけんどよ」

千枝子さんは苦笑した。

妙な関跡見物になった。私には、女たちがけんめいにシャベルを振るつたであろう道路が、景観にもまして心に沁みた。

坂を下りはじめたとき、千枝子さんが、

「大利^{おたり}のかあちゃん！」

と叫んで急停車した。竹カゴを背負い、山菜の束を手にした老女が、口をあけてこちらを見た。「変りねえけ？　うちの母ちゃんも快くなったからよ。そのうちまたすじ、このいいの入ったら届

けてやっかんね、待ってっせエ」

黒く皺ぼんだ顔が、松の樹間でふかぶかと低頭した。微笑したようでもあり、渋面になったとも見える。

マキさんは、とたんに頬をこわばらせ、眼をそむけた。こめかみを、ひとすじのけいれんが走った。相手からはずしたまま、かきツと見ひらいたまなじりが、微動もしない。

何秒か、時間が停った。

やがて、唾を嚥み下した彼女は、不本意げに、頭の高い会釈を返した。

「あんで、ば、つ、ばも可哀そうだっぺよ」

千枝子さんは、首をすくめ、母の機嫌を窺うようにつぶやくと、巧みな運転でカーブを下っていった。

私が、知人の家で初めてマキさんに逢ってから、もう足かけ四年になる。やはり、九月の、日曜日であった。

「何だか、きょうはこのうちにお客さんがくるって聞いたけど、土方休みの日は退屈なもので、またノコノコお茶飲みにきっちゃった」

「いいんだ、マキちゃん。親類みてえな人だから、氣イ遣わねで遊んでいきな」

知人も、ながいあいだ坑内夫を勤めた人である。私が、かつて十三年間旧平市に住んだときの友人の、岳父に当る。友人も、大手炭鉱の採炭夫で、閉山まで職を変えようとしなかった。

「なかなか涼しくなねえね。ここの母ちゃんは娘のどこさ行つたのけ？ きつい仕事ひとつしねえで家の中で通したくせに、何だつてまず胃イ病みなんてばっかしするんだっべねえ。わたしらは、体いじめてきた割りにガタがこねえな。ロクデナシの親だったけど、体だけは別談えにつくつてくれたんかしんねえ」

「おお、暑い、暑い」と、多少大袈裟にハンカチを使った。話し相手の妻女が不在で、見馴れぬ客がいるからであろうか。

そこは、福島県いわき市北好間、字源平野地の、元炭坑住宅である。コールドールを塗った黒い屋根の数戸が、水の涸れた深い堀を見下ろす山際に、へばりつくかたちで残っていた。

堀に架けられたほそい橋は、トロツコのレールに枕木を並べ、土を盛ったものだという。すっかり草が根付いて、頑丈そうであった。橋の向うは、右へかなりな上り急勾配の泥道。周辺は、他に家も人影もなく、しんとしていた。

淡いグレーに小花模様を白く抜いた、こざっぱりとした単服のマキさんは、栗色に染めた前髪をふくらませて、うしろに小さくまとめている。ひとすじのおくれ毛もなかった。膝の横には、更紗さらさの布に鼈甲べっこうまがいの丸い口のついた、しゃれた手提げ袋。

ふだんから無口な知人は、女客二人を扱いかねている様子。マキさんは、眼の遣り場に困ったふうになり、開け放された縁側から外を眺めた。かとおもうと、落ちつきなく手提げ袋からタバコを取り出して火をつけた。馴れた手つきであった。

「この母ちゃんには遅くなんのかな。わたしは、お行儀よくしてんの、ニガ手だから、タバコなんと喫ってごめんさいよ」

。何しろ、炭鋤稼ぎした者にや、これが離せねえもんだから、と、ニコリともせずに私を横眼で見た。

平時代の旧知には、炭鋤勤めの人が多かった。しかし、坑内で働いた女の人に出遇ったのは初めてである。私が思わず膝を乗り出すと、マキさんは手をつよく振った。

「いや、女が炭鋤で働いたなんて、いまさなら知らね人に外聞さらしする気はねえけんどよ」

知人は、まあまあ、と、とりなした。

「ながいこと平に住んだ人なんだ。たいていの話は通じっからよ」

一見、ざくばらんのようなだが、マキさんは芯に固い部分があるらしい。たまに、菓子をつまんだり、茶をすすったりはするが、私へは閑さした横顔を崩さなかった。

知人もやはり七十にちかい。彼は、大の酒好きである。酒量は少ないが、家にいさえすれば、独酌でチビリチビリとたのしんでいた。上がり酒（坑夫が昇坑後に飲む酒）の習慣が抜けないのか、年金生活者になってからもそれは変らなかった。

「マキちゃん、ちゃんとやんねかい？」

「ンだね」

つまみは柿のタネ。

臉にほんのり紅味がさしてきたマキさんの顔は、艶もよく、皺も少ない。ただ、坑内でながく重労働をしたにしては、体つきが華奢きゃしゃすぎるようだった。

話題が途切れて、二人の盃さかばかりがひんぱんに上下した。彼女はだいぶイケるくちのようである。私はとりつくシマしまがなかった。

「町場の人には分んめけんど、こころで稼ぐっちゃ、女も炭鉱しかなかったんだよねえ」
知人は、うなずきながら、入れ歯の口をもぐもぐさせた。

彼女はまだけっして私への警戒心をゆるめてはいない。しかし、微醺めいそんがそうさせるのか、ときおり私へ向けられる視線は、ずっとやわらいだ。否、何かが底から突き上げてくる、といった風情げいもみえた。

「戦争前、大正じぶんに炭鉱で働いたのは、そう言っちゃ何だけんど、食い詰め者か、ヤクザレおやじを持ったか。ま、このうちみたいに、満洲の引揚げ、て人もあっけどよ。何ぼ体裁ていさつくたって、昔、キンキンの茶釜ちかまがありました、なんて言っても通用しねえ。何かしら曰いわくつきが多かつたんだ」

。そういうところに生れた子どもは、いい迷惑めいわくよねえ、と、遠い目つきをした。

「いまの人は、三食昼寝付き、なんて言うけど、わたしらは、若いときから半日^{はんび}とてのんびり暮した覚えはねえよ。そんなでもべつに泣きもしねえし、結構おぐち叩いて喧嘩もした、笑いました」

ただねえ、と彼女は言葉を切つて盃を伏せた。もう堪能したのか、話に興がのつたというのか。「好んで坑内なソドに入つたわけではねえよ。親にドシナラレて（怒鳴られて）、何とも仕様なく入つたんだけど、そこはソレ、同じ人間のあつぱりよ。わりイことばっかもありやしめえし——」

父は、酒と賭博の好きな渡り坑夫であつた。母は、体は動かすが、どちらかといえば氣働きのない、意氣地なし。

「ともかく、わたしのお父つつあんてのは、酒飲むちゆうと、怒鳴るワ、暴れるワ、クセわりイ人だったのよ。毎日毎日、親たちの喧嘩にチリチリしてたんだ。まア、炭鋤ちゆうとは、どこの長屋でも喧嘩はするけんともね。うちのは、特別盛大で、目立つほうでなかったっべか」

怒鳴る、というところが、とくに力を入れるせいか、ジナル、と聞えた。

「ああいう人は、自分の子どもだたつても、どこまで可愛かったものかねえ。わたしは、親に抱かれたつて覚えもねえんだから。学校もち、ようろく（まんぞく）に上がんねで、八つの年から、子守り奉公に出されたんだよ。こんな話、おもせえく（おもしろく）もねえべけんどね」

当時の炭鉱は、すべて飯場制度であつた。

独身の男や出稼ぎ者は飯場に住み、家族のある者には長屋が与えられる。炭鉱では、いずれかの飯場に属さねば働けない仕組になっていた。

坑夫は、各飯場の人、繰りによって仕事を割り当てられた。怠ければ手きびしく督励され、甚だしい場合は、制裁をうけるか、誡首された。カネに窮して飯場頭はんばがしらに泣きつくと、賃金から容赦なく差し引かれ、また借金を重ねる、悪循環になる。

マキさんの父が、常磐炭田のほとんどのヤマを渡り歩いたのは、飯場頭と喧嘩をしたり、借金で首が回らなくなるのが主な原因であつた。しかし、どこの飯場でも、常時坑夫募集をしていたから、稼ぎ人はツルハシー一丁持てば、簡単にどこかへもぐり込めたのである。

三人姉妹の次女であつたマキさんは、そんな父のために、就学が一年遅れたうえに、欠席が重なり、小学四年で退学してしまつた。二歳ちがいの姉は、ただの一日も学校へ行かなかつたという。十三歳の春であつた。父は、独断で彼女を紡績工場の募集人に引き渡した。荷の受け渡しに似ていた。東京・亀戸かめいどの女工寄宿舎へ着いても、まだ狐につままれた心地であつた。

姉も、奉公先から歸つた日に、別の工場の人が連れにきた。マキさんは前借金五十円、姉は七十円。大正十年である。合計百二十円の大金は、全額父の賭博で消えた。

東京で一年間紡績女工をした姉妹は、翌年、父に無理矢理呼び戻された。坑内で、あと山（採